

Classification of the Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia and Associated Factors in Inpatients in Psychiatric Hospitals – with Special Reference to Rehabilitation

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード: 作成者: 塩田, 繁人, Shiota, Shigehito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/48204

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平成 29 年 2 月 9 日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1429022010

氏 名 塩田 繁人

論文審査員

主 査（教授）染矢 富士子

副 査（教授）柴田 克之

副 査（教授）少作 隆子



論文題名

Classification of the Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia and Associated Factors in Inpatients in Psychiatric Hospitals –with Special Reference to Rehabilitation

【論文内容の要旨】

認知症高齢者の 90% に心理・行動障害 (BPSD) を呈し, BPSD 治療を目的に精神科病院への入院が増加している. 近年, 精神科病院では早期に BPSD 治療を行い, 生活障害を改善して地域生活の支援に繋ぐことが求められている. 本研究の目的は, 精神科病院に入院した認知症高齢者の BPSD 分類と, 関連する因子を明らかにして, 非薬物療法の戦略を立案すること. 対象は 2013 年 4 月から 2015 年 9 月, 高松病院の急性期病棟に BPSD 治療で入院した認知症高齢者 176 例である. 方法は後方視的に調査し, 入院 1 週以内に評価 (年齢, 性別, 同居家族, 診断名, NPI, MMSE, N-ADL) を用いた. 統計解析は NPI の 12 項目の因子分析を行い, 因子得点を従属変数, 5 項目の評価を説明変数として重回帰分析を行った. 対象者 176 例の内訳は AD 112 例, DLB 51 例, VD 9 例, 他 4 例であった. 因子分析より因子 1 は Hyperactivity (焦燥, 脱抑制, 易刺激性, 異常行動), 因子 2 は Affective symptoms (うつ, 不安, 食行動の異常), 因子 3 は Psychosis (幻覚, 妄想) の 3 因子に分類された. 重回帰分析より Hyperactivity は MMSE が低値, 若年齢の 2 項目, Affective symptoms は女性, 食事の自立度が低い 2 項目, Psychosis は認知症のタイプ (DLB) の 1 項目で有意な関連を認めた. 非薬物療法は, Hyperactivity に単純な活動に導入してエネルギーを発散し, 自己有効感を高める. Affective symptoms には重度のうつ症状により, 食物が摂取できない場合が多く早期から離床を促すための, 体操やストレッチの導入. Psychosis には対象者の 1/3 が DLB を含み, 疾病教育と妄想, 幻視への対応を指導する必要性が示唆された.

【審査結果の要旨】

本研究は, 入院時認知症高齢者の BPSD の特徴を 3 因子に分類でき, さらに重回帰分析の結果から, 各因子に影響を及ぼす臨床症状と非薬物療法 (作業療法) の対応を示すことができた. 先行研究では外来患者や地域在住の BPSD の報告はあるが, 精神科病院に入院した報告はなく, 臨床的意義も高い. 以上, 学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき, 博士 (保健学) の学位を授与するに値すると評価する.